

日本の地質再訪

小野直路¹⁾

「巡検に行ってみませんか？」一昨秋だったか、取材中に産総研の高橋雅紀さんから誘われたときは、「巡検」という言葉も初耳でした。誘われるままにおそろおそろその「巡検」に参加してみても、秩父荒川峡に現れた高橋さんの出で立ちに、まず目を奪われました。腰からぶら下げたハンマー、肩から提げた調査バッグにはルーペやクリノメータ、折り尺、地形図などの七つ道具。専門に必要な装備が過不足なく入っていました。ここに長年にわたる多くの地質学者たちの経験と知恵が集約されているに違いない、専門性が磨き上げたスタイルの完成度に魅了されました。その姿を通じて地質学者という存在が私には、日本列島の山河をくまなく歩き、この大地の来歴を解き明かそうとしている“現代の山伏”のようにも見えました。

その秩父巡検で、やはり、典型的な地質調査の出で立ちに身を固めた小川乃絵さんという女性に出会いました(第1図)。そのお姿から、若くしてそうした日本列島の謎に深い関心を持つ一人であるに違いないとお見受けしました。話を伺うと、案の定大学で地質学を学んだ後、横浜サイエンスフロンティア高校で地学を、現在は東京学芸大学附属高校で理科を教えられるとのことでした。巡検の途中の雑談で、私が以前にNHK特集「地球大紀行」という番組を担当したという話をした時、小川さんが大きな声を上げました。「私はその番組を見て、地質学を志したんです。」うれしい出会いでした。地球大紀行の本もまだ自宅にあるというので、巻末の座談会に当時の私の写真が出ているとお伝えしたところ、帰宅後、早速確かめてくれたらしく、メールをいただきました。「おお、お若い!(失礼)」。確かに、1987年に一年がかりで放送した「地球大紀行」からすでに30年近い歳月が流れていました。

個人的な事情をいわせていただければ、あの番組の放送以来、私は行政職に転じて、科学番組の制作からはしばらく遠ざかってきました。今回、「地球大紀行」を制作したディレクターとして自分なりの区切りを付けようと、日本列島の歴史に焦点を当てた番組を思い立って、地質学者の方々への取材を再開したわけです。すると、取材先で多くの地質学者の方から「地球大紀行」の鮮明な記憶を拝聴す

ることになりました。小川さんとの出会いはその最初の驚きであったわけです。その後、小川さん以外の何人もの方から、あの番組をきっかけに地球科学を志したという話を聞かせていただきました。科学番組の制作者にとって、制作した番組を見た若者が、その分野を志してくれるのは、何よりの喜びといえます。まして、何十年後かに同じ分野の取材で、かつて番組を見てくれた若者が科学者に成長して再び出会い、その研究成果を科学番組に盛り込むことが出来るのは、大きな驚きでした。科学と科学番組のこの上ない幸福な関係といっても差し支えないでしょう。

ところで、今回改めて痛感することですが、大部分の日本人は自分の住む土地や、日本列島そのものの地質学的な歴史に関心を持たず過ごしています。しかし、逆に一度関心を開かれれば、自分にゆかりのある土地がどのような地質学的歴史を持っているか、関心を払わざるを得ません。そして、そうなる以前まったく関心を持たずに過ごしてきたことに、むしろ驚きをもって気が付くでしょう。私もその典型的な一人でした。紀伊半島の海辺で育った私は今から思えば、地質学のかげがえのないサンプルを目の前にしながら、それに目を覚まされることもなく過ごしてしまいました。子供の頃に毎日のように遊んだ磯は、今から思えば四万十帯の付加体であったかとか、一時期凝った海辺での岩石集めも、そうした古い地層からのものであったらうかと遅まきながら思い至っています。

地質学会には3,900名の会員がいると聞きます。この方々が調査し理解して来た日本列島像と、一般の私たちが持つ日本列島のイメージの間には大きなギャップが存在しています。しかし、無関心な人々もひとたび目を覚ませば、自分たちが踏みしめている大地の来歴を知ることは、家系図を知ることにも似た根源的な関心の一つとなるはずです。「巡検」という言葉に私が初めて接触したように、要はきっかけでしょう。そこへ導いてくれるのは、私たちの足下にある日本列島の謎に挑んで山野を彷徨する地質学者たち、いわば“現代の山伏たち”です。

今、私は出来ればそのハンマーをぶら下げて山野に分け入る地質学者の方々が数多く登場する番組を作りたいと

1) テレビ・プロデューサー

キーワード：日本列島、地質、科学番組



第1図 埼玉県秩父盆地周辺の地質巡検写真（2014年10月28日）。荒川支流、赤平川の取方大露頭と、長瀬岩畳に露出する三波川変成岩。

思っています。その番組を通じて“山伏たち”が何十年にもわたって解き明かしてきたこの列島の驚くべきドラマを、科学番組としてまとめ上げてみたいと思っています。それは、無関心と地質学的悠久の時の間をつなぐ試みでもあります。そして、さらなる私のもくろみは、その番組が一般視聴者と“現代の山伏たち”との仲立ちとなって、再び新たな地質学者の誕生につながっていけば、科学番組の制作に関わるものとして、これに勝る喜びはないと考えています。



小野直路（おの なおじ）

和歌山県串本町出身。1971年日本放送協会に入局。岡山放送局、科学番組部等を経て、NHKエンタープライズ社長（2008年～）、NHK副会長（2011～2014年）の後、現在、科学番組プロデューサー。

ONO Naoji (2016) Geo-Japan revisited.

(受付：2016年9月10日)